



勇太の約束

ふるさとのバス停で勇太は不思議な声を聞いた。
長い間忘れていた、遠い昔の子供のころの大切な約束
厳しい世の中を夢中で生きたきた勇太に聞こえてきたなつかしい声

何十年ぶりに帰ってきたふるさとで、勇太が出会った不思議な時間
わすれていた大切なものを思い出させてくれる掌編戯曲

「勇太の約束」

登場人物

山田 勇太 男、六十歳

洋子先生 女

タヌキ（声のみ）

夏の夕暮れである。

ある山合いの町の町外れにバス停がある。

舞台中央にバス停の標識と大きな木があり、山田がカバンを持って登場、バス停の標識の時間表を見て、腕時計を見て、それから所在なげにタバコを吸始める。

しばらく舞台には静かな時間が流れていく。

タヌキの声が小さく聞こえる。

狸（声） 勇太。勇太。

山田（少し耳を傾ける）・・・。

狸（声） 勇太。勇太。

山田（不思議そうに）ん。だれじゃ。だれかわしの名をよんだか。

狸（声） わしじゃ。わしじゃ。

山田 わしじゃ、わからん。お前はだれじゃ。

狸（声） 忘れたのか。わしじゃ。お前が子供のころに一緒に遊んだ裏山の狸じゃ

山田 裏山の狸？

狸（声） そうじゃ。勇太。帽子を持ってきたか。

山田 帽子、何のことじゃ。

狸（声） それも忘れたのか。勇太は約束したじゃないか。一度でいいから腹いっぱい芋をくいたい。芋が食べたらかわりに帽子をやるというからワシはお前の家の前に芋を持って行ってやったぞ。

山田 わしはそんなことは約束しとらん。

狸（声） それから勇太のおっかさんが病気になるった時、魚をとってきたら帽子をやるというからワシはお前の家の裏に魚を持って行ってやったぞ。

山田 わしはそんなことは約束しとらん。

狸（声） 勇太、勇太、勇太は本当に忘れてしまったんか。
山田 そんな昔のことは何ひとつ覚えておらん。ましてや狸のことなんかワシにはなんのことかわからんわい。
狸（少し悲しそうな声） そうか。勇太はワシのことも忘れてしまったんか。

あたりは深い夕闇に包まれようとしている。

狸の声は聞こえなくなる。

突然、上手から洋子が登場する。

洋子 勇太君。

山田（驚いて洋子を見るが、誰だかよくわからない）

洋子 忘れてしまった。

山田 どなたでした・・・？

洋子 私よ、ほら、小学校の時の。

山田（驚いて）あ、もしかしたら洋子先生と違いますか。

洋子 そう。先生よ。驚いた。思い出してくれた。

山田 はあ、でもどうして洋子先生が、こないなところで。

洋子 あら、私はいつもこのバス停まで家からバスで通っていたのよ。

山田（遠くを見て思い出すように）そうやった。わしらはむこうの神社の木の上から洋子先生が乗るバスがくるのをいつも眺めていた。いつも今時分の夕焼けがみえる時間やった。

洋子 そうよ。ここからだによく見えるじゃない。あれでしょ。あの楠木でしょ。みんな男の子たちはあの上にあがって手をふってくれたのが先生にも見えたわ。

山田 もう、家に隠れてしても、どこにいつてもたんな。あの楠木は。

洋子 よくみえるじゃない。ほらあそこに。あそこまではズツと畑が続いているから、神社の建物や森がよく見えるわ。

山田 先生、先生には見えるんですか。もう畑なんかどこにもないのに先生には畑がみえるんですか。楠木もみえるんですか。

洋子 勇太君には見えない？

山田（不思議そうに洋子を見て）それに、先生は50年

前とかわらない。あのころの、昔の、小学生の時の、先生は何にも変わっていない。

洋子 ふふふ、そうね。勇太が帰ってくるなんて滅多にないでしょう、だからなつかしくなって。もうあれから50年ですものね。

山田 (気持ちがおみ上げてきて) 先生は、あの時、みんなを助けようとして。あの暑い夏の日に。・・・。

洋子 勇太は私の年を追い越して、それからもういくつもの時代が変わって、そうそう勇太は社長さんなんですよ。

山田 (すこし照れながら) 社長ゆうたって小さな会社で、社長兼小使いみたいなもんですけどね。

洋子 ううん。りっぱなもんよ。勇太は頑張ったわ、みんなのぶんまでがんばったわ。

山田 昨日、学校にいつてきましたよ。僕たちの校舎は焼けてしまったから建て替えられて、それも何年か前に廃校になって、そうそう僕たちがいつも遊んだ学校の裏の城跡にもいつてみました。でも不思議だあな。昔の先生にまた、会えるなんて。

洋子 それはね。勇太が私のことを思い出してくれたからよ。私やみんなのことを思い出してくれたからよ。

山田 みんなはどうしているんですか。

洋子 みんなは・・・みんなはあの時のまま、小学生のまま。そりゃあそうでしょう。あの時、助かったのは勇太だけですものね。

山田 あの日、この町がアメリカの空襲で焼けてしまった時、学校も焼けてしまった時、僕等は学校の庭で遊んでいた。

洋子 そこへアメリカの飛行機が飛んできて、空襲警報がなって、私は自転車でお家に帰るところだったわ。

山田 僕たちは校舎の中へ逃げたんです。それがいけなかった。爆弾の一つが僕たちの逃げた校舎の天井に命中して、天井を突き破って僕等の頭の上におってきて、それからみるみる校舎を火の海にしたんです。

洋子 私は丘の上から学校が燃えるのが見えたから、急いで学校に引き返した。そしたら、勇太が走ってきてみんなが学校の中にいる、って叫んだの。

山田 先生は、大人達が止めるのも聞かずに燃えている校舎の中に飛び込んでいった。みんなを助けるために。だけど先生もみんなも帰ってこなかった。

そして僕だけが助かった、ぼくはみんなを置いて逃げてきたんだ。ぼくが逃げなかつたら先生も死ぬことはなかった。ぼくはみんなや先生を殺した卑怯者なんだ。

洋子 違うわ。勇太は名前のとおり勇氣があつたから火の中から飛び出して生き延びることができたのよ。卑怯者なんかじゃない。みんなや先生の人生を生き延びるために、神様が勇太だけを助けたのよ。

山田 みんなの人生、先生の人生。みんなや先生はあの時人生が終わってしまったんですね。戦争が終わって僕は疎開先のこの町から大阪に帰っているいろいろなことがあつて、いつかこの町やみんなのことを忘れてしまった。戦争のこともあの夏のことも忘れてしまった。

洋子 でも、いつか忘れていた私たちのことを勇太は思い出してくれた。

山田 でも、ぼくには不思議なんです。あの時どうして僕だけが助かることができたのか・・・。

洋子 それは勇太にはみんなにはない力があつたからでしょう。

山田 違うんです。僕たちの回りに火の手が上がったとき、みんなは表のほうへ逃げようとして、廊下のほうへ走っていったんです。でも僕だけは反対の裏のほうへ逃げていった。

洋子 勇太は運がよかつたのよ。

山田 夢中で裏のほうへ逃げて行って、そしたら階段の下の倉庫から抜け道のようなものがあつて気がついたら学校の裏の竹藪にいた。どうしてだろう。あんな抜け道、だれも知らなかつたのに。

そうだ、思い出したぞ、思い出したぞ、あの時も「勇太、勇太」って小さな声が聞こえたんだ、あんな火の中でみんなが泣き叫んでいる時、小さな声が聞こえたんだ。

洋子 なんなの、その声って。

山田 (少し泣きながら) 思い出したぞ。狸、お前は教えてくれたんだ。学校の中から裏山へ抜ける抜け道。お前はわしを助けてくれたんだ。

いつのまにか舞台は夜のとばりに包まれている。洋子の姿は、いつか見えなくなる。

突然、うれしそうな狸の声が聞こえる。

狸(声) 勇太、勇太、思い出してくれたんか。

山田 うん。確かに思い出したぞ。お前は裏山の狸じゃ。じゃが、声は聞こえるがわしにはお前の姿が見えんぞ。

狸（声） それはな。勇太、勇太がもう大人になつてしまつたからじゃ。大人になつて長い年月がたつたからワシの姿がみえんのじゃ。

山田 そうか。お前の姿はもうわしには見えんのか。お前が持つて来てくれた芋も魚もハッキリと思ひ出したぞ。

狸、狸、思い出したぞ。確かにわしはお前に約束した。

そうじゃわしは自分が生きていくのに夢中で、お前との大切な約束を長い間忘れていた。

狸（声） そうじゃ。勇太は約束したぞ。お前の帽子をわしにくれるつて。

山田 そうか。お前は長い間待つていたのか。待つておれ。わしは大阪に帰つて世界で一番りっぱな帽子を捜してお前のために買つてくるぞ。

狸（声） 勇太、勇太、わしがほしいのはお前があの時被つていた黒いひさしのついた学生帽じゃ。

山田 あの帽子。小学校の時に被つていた黒いひさしのついた帽子。お母さんが夏は白い布でカバ・を作つてくれたあの帽子じゃな。わしはきつと捜すぞ。あの時わしが被つていたのと同じ帽子を、みんなが被つていた帽子を、みんなと一緒に焼けてしまつた帽子を、そうじゃ、みんなの数だけ買つてくるぞ。・・・

しだいに暗くなつて、勇太の姿も見えなくなる。

（幕）